

平成 30 年度とちぎっ子学習状況調査報告書（概要）について

栃木県教育委員会事務局学校教育課

1 調査の概要

(1) 調査の目的

本調査の実施により本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し、児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに、各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより、本県児童生徒の学力向上に資する。

(2) 調査の対象

県内の公立学校に在籍する以下の学年の全児童生徒を対象とする。

ア 小学校調査

小学校第 4・5 学年、義務教育学校第 4・5 学年、特別支援学校小学部第 4・5 学年

イ 中学校調査

中学校第 2 学年、義務教育学校第 8 学年、県立中学校第 2 学年、特別支援学校中学部第 2 学年

(3) 調査の内容

ア 児童生徒に対する調査

(ア) 教科に関する調査

- ・ 小学校調査は、国語・算数・理科の 3 教科とし、中学校調査は、国語・社会・数学・理科・英語の 5 教科とする。
- ・ 出題範囲は、調査する学年の前学年までの学習内容とする。
- ・ 出題内容は、学習指導要領に基づき、教科の目標及び内容に即した基礎的・基本的な知識・技能及び思考力・判断力・表現力等に関わる内容とする。

(イ) 質問紙調査

- ・ 調査する学年の児童生徒を対象に、学習意欲、学習方法、学習環境、家庭学習等に関する質問紙調査（以下「児童生徒質問紙調査」という）を実施する。

イ 学校に対する調査

- ・ 学校における指導に関する取組や学習環境等に関する質問紙調査（以下「学校質問紙調査」という）を実施する。

(4) 調査実施日 平成 30（2018）年 4 月 17 日（火）

(5) 調査を実施した学校・児童生徒数

| 学 年 | 実施校数 | 内 訳 | 児童生徒数 |
|-----------|---------|--------------------------------|--------------|
| 小学校第 4 学年 | 3 6 5 校 | 公立小学校 3 6 1 校 | 1 6, 1 0 0 人 |
| 小学校第 5 学年 | | 特別支援学校小学部 4 校 | 1 6, 4 3 1 人 |
| 中学校第 2 学年 | 1 6 0 校 | 公立中学校 1 5 6 校 特別支援学校中学部 4 校 | 1 6, 0 0 7 人 |
| 全 体 | 5 2 5 校 | | 4 8, 5 3 8 人 |

※調査対象児童生徒の在籍がなかった小学校・義務教育学校・特別支援学校小学部 3 校
中学校・義務教育学校・特別支援学校中学部 4 校

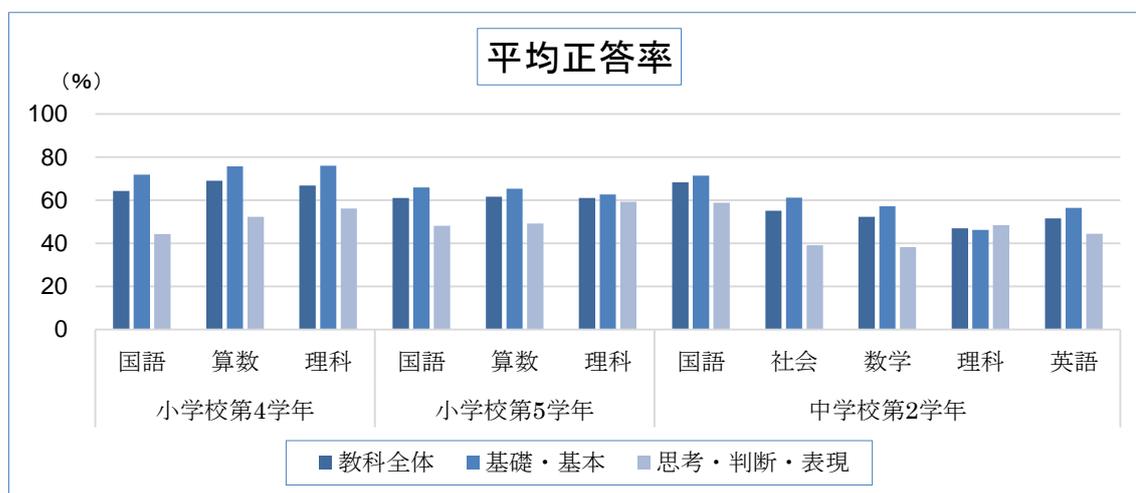
※調査を実施した児童生徒数は、回収した解答（回答）用紙が最も多かった教科及び質問紙の解答（回答）用紙の枚数で算出。

2. 教科に関する調査

平均正答率

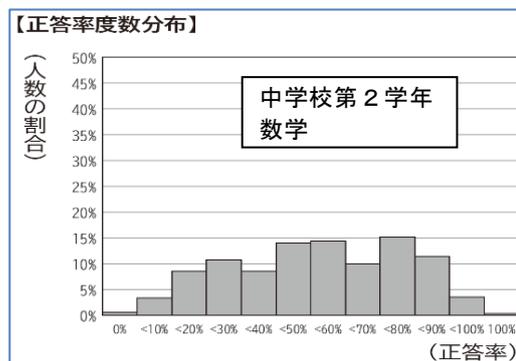
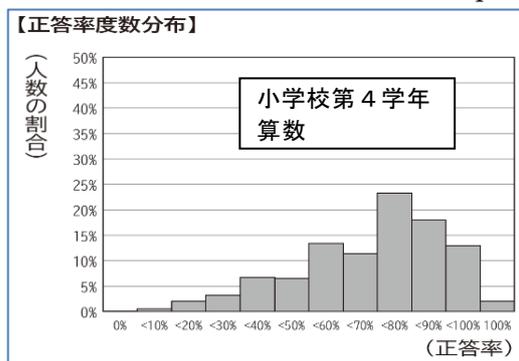
(%)

| 学年 | 教科 | 教科全体 | 基礎・基本 | 思考・判断・表現 |
|---------|----|------|-------|----------|
| 小学校第4学年 | 国語 | 64.3 | 71.9 | 44.3 |
| | 算数 | 69.1 | 75.7 | 52.3 |
| | 理科 | 66.9 | 76.0 | 56.2 |
| 小学校第5学年 | 国語 | 61.0 | 65.9 | 48.1 |
| | 算数 | 61.6 | 65.3 | 49.2 |
| | 理科 | 61.0 | 62.7 | 59.3 |
| 中学校第2学年 | 国語 | 68.4 | 71.4 | 58.8 |
| | 社会 | 55.1 | 61.2 | 39.2 |
| | 数学 | 52.3 | 57.2 | 38.3 |
| | 理科 | 47.0 | 46.3 | 48.5 |
| | 英語 | 51.6 | 56.4 | 44.4 |



- (1) 基礎的・基本的な知識・技能に関する問題では、小学校において4年生は3教科、5年生は2教科で平均正答率が65%以上である。中学校においては、平均正答率が60%以上の教科は2教科である。基礎的・基本的な知識・技能に関しては、知識や技能を活用する場面を計画的に位置付けたり、言語活動の充実を図ったりすることなどを通して、当該学年において確実に身に付けさせることが大切である。(p3~5)
- (2) 思考力・判断力・表現力等について、課題があることが明らかになっている。特に、記述式問題における平均正答率が低い傾向であり、他の解答形式と比較すると、無解答率が高い状況が見られる。授業において、考えを深めたり、広げたりするために「問い」を工夫したり、自分の考えを書く活動を位置付けたりするなど、思考力・判断力・表現力の確実な育成に向けて学習指導の改善・充実を図ることが大切である。(p3~5)

- (3) 学年が上がるにつれて、教科によって正答率度数分布のピークが低くなっていたり、複数のピークが現れたりしている。また、4層分析※の結果から、A-D層の差が広がる傾向が見られる。これらのことから、下の学年でのつまずきが、上の学年の学習に影響していることが考えられる。系統性を踏まえ、身に付けさせるべき内容を当該学年において確実に定着させることが大切である。(p6~27)



※4層分析について

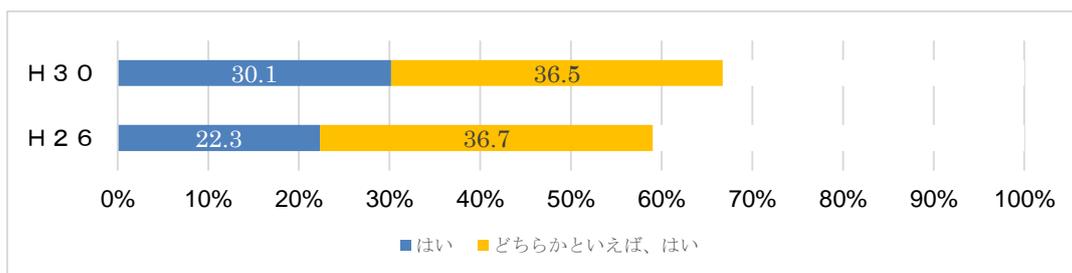
4層分析とは、学力層を上位から順に25%ずつ、4層(A-D層)に分けて分析する方法で、各層の平均正答率から学力層の分布を分析することができる。

- (4) 経年問題では、小学校4年理科の「方位を調べる道具の名称が分かる」問題について、前年度と比較して平均正答率が10ポイント以上高くなった。また、中学校2年英語科の「人称代名詞の目的格を問う設問」においても、平均正答率の推移から、改善の傾向が見られる。引き続き課題の見られる問題については、継続的に指導の改善・充実を図ることが大切である。(p29~39)

3. 児童生徒質問紙調査

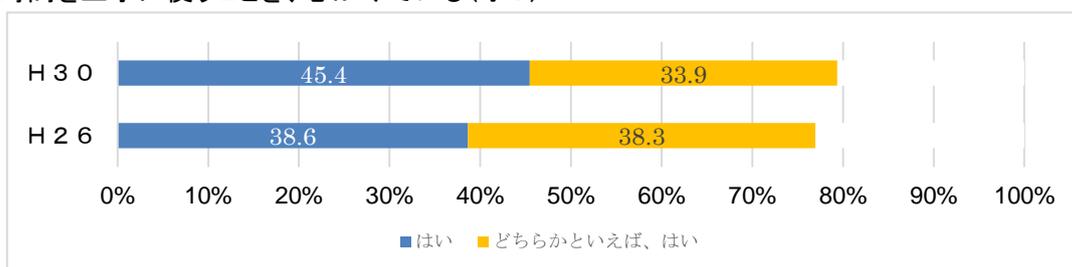
- (1) 「家で、テストで間違えた問題について勉強をしている」については、平成26年度調査結果と比較すると「はい」と回答した児童生徒の割合は、小4で3.4ポイント、小5で5.6ポイント、中2で7.8ポイント増加している。このことから、年々家庭における学習習慣の定着が図られ、主体的に学習に取り組む児童生徒の割合が増えていると考えられる。(p41,42)

家で、テストで間違えた問題について勉強をしている(中2)



- (2) 「時間を上手に使うことを、心がけている」については、平成26年度調査結果と比較すると、「はい」と回答した児童生徒の割合は、小4で1.6ポイント、小5で6.8ポイント、中2で4.0ポイント増加するなど、肯定的な回答をしている児童生徒の割合は年々高くなっている。引き続き、時間を適切に使い、規則正しい生活を送ることができるよう指導していくことが大切である。(p58,59)

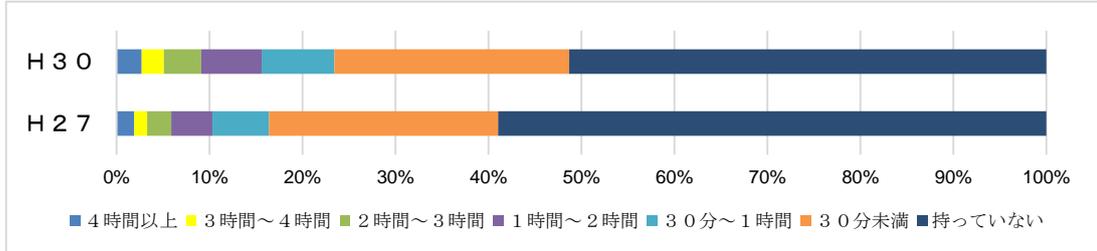
時間を上手に使うことを、心がけている(小5)



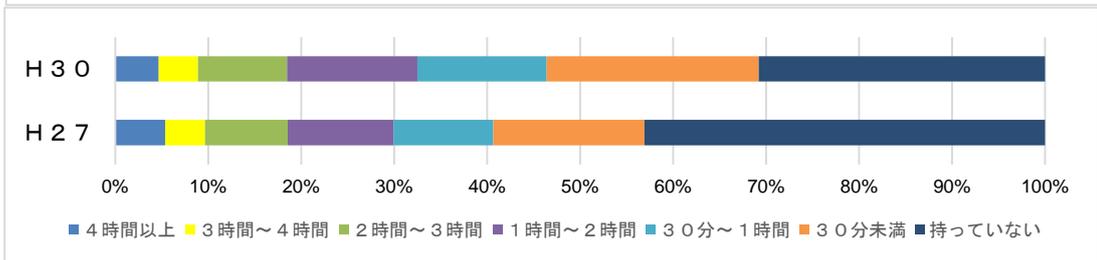
- (3) 携帯電話やスマートフォンに関して、「持っていない」と回答している児童生徒の割合は、どの学年も年々下がっている。また、使用時間については、特に小学生で長時間使用する割合が増加の傾向にある。家庭に対して、適切な使用方法や使用時間について啓発していくと同時に、児童生徒に対しても使い方の指導を段階的に行うことが大切である。(p56,57)

ふだん(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをしますか(携帯電話やスマートフォンを使ってゲームをする時間は除く。)

小5

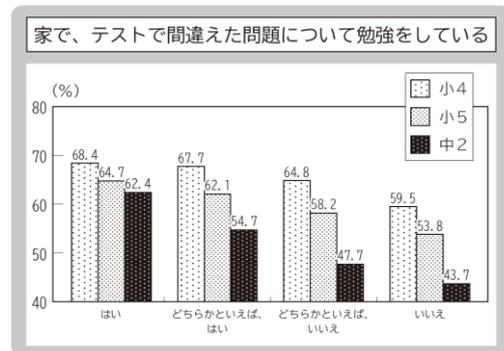
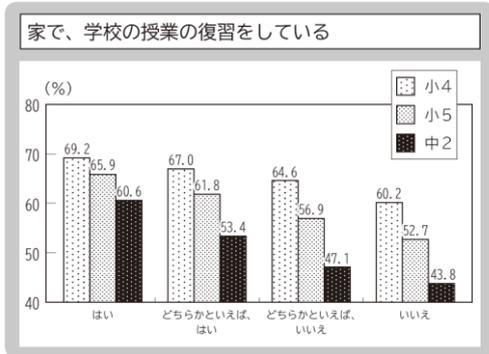


中2



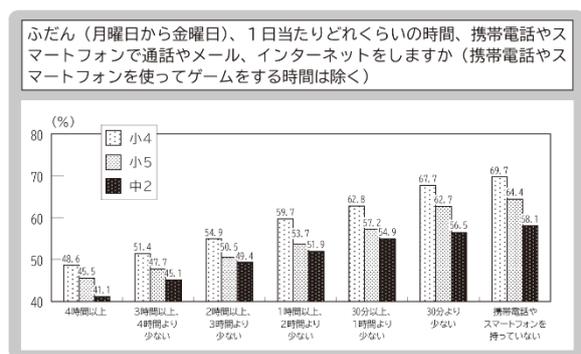
4. 教科に関する調査と児童生徒質問紙とのクロス集計

- (1) 「家で、学校の授業の復習をしている」、「家で、テストで間違えた問題について勉強をしている」について、教科平均正答率との関連を見ると、学んだことを振り返る習慣が身に付いている児童生徒の方が、教科平均正答率が高い傾向が見られる。特に中2では、「はい」と回答している生徒と「いいえ」と回答している生徒の教科平均正答率に大きな差が見られ



- (2) 平日の携帯電話・スマートフォン使用時間について、教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年で、平日の携帯電話・スマートフォン使用時間が少ない児童生徒の方が、教科平均正答率が高い傾向が見られる。

「4時間以上」と回答している児童生徒と「持っていない」と回答している児



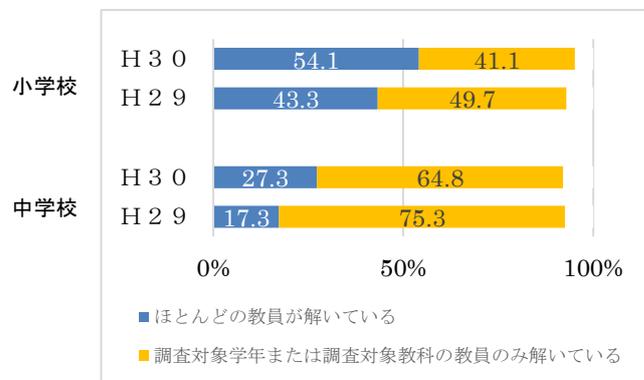
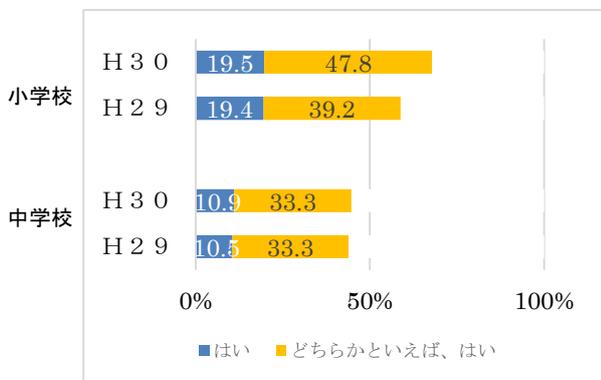
児童生の教科平均正答率との差は、小4は21.1ポイント、小5は18.9ポイント、中2は17.0ポイントである。(p57)

5. 学校質問紙調査

- (1) 「とちぎっ子学習状況調査や全国学力・学習状況調査等の問題を、年間指導計画、評価計画に位置付ける等、計画的に調査問題を活用している」について、肯定的な回答をしている学校の割合は、昨年度と比較して、小学校では58.6%から67.3%、中学校では43.8%から44.2%と高くなっている。また、「とちぎっ子学習状況調査実施後、児童生徒に身に付けさせたい力の確認等のために、教員自ら調査問題を解いている」について肯定的な回答をしている学校の割合は、小学校で95.2%、中学校で92.1%であった。このことから、小・中学校ともに調査問題を有効に活用している学校が増加していると考えられる。(p72)

とちぎっ子学習状況調査や全国学力・学習状況調査等の問題を、年間指導計画、評価計画に位置付ける等、計画的に調査問題を活用している

とちぎっ子学習状況調査実施後、児童に身に付けさせたい力の確認等のために、教員自ら調査問題を解いている



- (2) 「教職員間で、互いの授業を見せ合っている」について、「はい」と回答している割合は、小学校では60.0%、中学校では53.3%となっている。また、「教職員は校内研修や公開授業などに積極的に参加している」について、「はい」と回答している割合は、小学校が66.2%、中学校が58.2%である。今後も、教職員間で連携を図り、学校全体で組織的に授業研究等に取り組んでいくことが大切である。(p70,71)

教職員間で、互いの授業を見せ合っている

教職員は校内研修や公開授業などに積極的に参加している

